

\*\*\*\*\* 研究エッセイ（特集：日系ブラジル人）\*\*\*\*\*

## そこにいるおまえは誰なのか？ —多文化共生を語る立場を問い直すこと—

愛知県立大学教育福祉学部准教授  
松宮 朝

『共生の文化研究』創刊号では、「なんで『多文化共生』を考えるんですか？なんでそんなに一生懸命になれるんですか？」という学生からの問いかけに対するリプライとして、旧西ドイツにおける私自身の体験と、それが今現在の多文化共生を考える立場に与えた影響について書かせていただいた（拙稿，2008a）。これを読んだ数名の方から感想をいただいたのだが、その中で最も印象に残り、考えさせられたのが、私自身が「多文化共生」をめぐる問題の「当事者」であり、「多文化共生」に関する研究をする動機や必然性が理解できたというコメントである。私自身が、まさしく「外国人」としての経験をし、その中で「多文化共生」という課題を見つけ、研究・実践するという、ある意味大変よくできたストーリーをイメージしていただいたわけである。確かに、私自身のどこかに、そのような要素はあるのかもしれない。しかし、私がフィールドワークを行っている西尾市においては、少なくとも「当事者」ではなく、後述する通り研究のきっかけも、私自身の生活史から直接的に導き出されたものではない。つまり、一本の糸で自分自身の立場を整合的に説明するストーリーなどは存在していないのである。また、西尾市での住民による多文化共生の実践に共同でかかわってきた

のだ、という印象を与えていたとするならば、私自身、次のような批判を受けてしかるべきだ。「甘ったれるな、あるいは丁重にこう言われたかもしれない。思い上がらないで下さい、と。」（中野，1975:5）。

では、そこにいるおまえは誰なのか？

もちろんこんな詰問をされたことはない。しかし、直截に問いつめられたことはないとはいえ、これまでのフィールドワークや様々な場で研究報告をさせていただく中で、この点がずっと気になっていたことも事実である。

この問題についてあらためて考えるきっかけとなったのは、第189回中部人類学談話会のシンポジウム「日系ブラジル人問題とは：研究者、実践者、当事者、それぞれの立場から」（共催：愛知県立大学多文化共生研究所、2008年9月19日）にて、「研究者」という立場からの報告を求められたことによる<sup>(1)</sup>。

ここでいう「研究者」の立場とは何か。「実践者」でもなく、「当事者」でもない、とひとまずこたえることができるかもしれない。しかし、それだけでは、どうにも十分に伝え切れていないという感触が残る。まずもって、「当事者」とは何かという点ひとつとつとつても大いに議論の余地がある問題だ（宮内・今尾編著，2007）。そして、そも

そも決してぶれることのない、確固とした立場はあるのかという問題もある。たとえば、このミニ・シンポでは、私自身、「研究者」という立場からの報告を求められ、また、中部人類学談話会という専門外の場での報告という点を強く意識していたため、「日系ブラジル人問題」<sup>②</sup>に関して、社会学会での議論と人類学的視点との交流がどのように可能かという「研究者」としての立場を貫こう、さらに言えば、「実践者」、「当事者」とは異なる立場を意識して報告をしようとしていたように記憶している。

しかし、これはあくまでもその場で意識していたことであり、別の報告の場では異なった形で、それぞれの場の文脈に応じて語ることを変えていた。つまり、私自身の「研究者」という立場についてさえ固定的なものではなく、常に変わり続けていたのである。自己弁護をするようだが、それは方便としてではない。誰に伝えるか、その場にいる方々がどのような関心を持っているかによって、強調点を変えることは当然だと今でも感じている。そして、フィールドワークの場面でも、その場に応じて自分自身のあり方を変えていたはずだ。

ここで見てきたような問題、すなわち、どのような立場から、どのような認識に基づいてものごとをとらえ、そして語っているのかという立場性の問題は、決して個人的に閉じられた問題設定ではなく、フィールドワークが大きな位置を占めている文化人類学、そして社会学にとって根本的な課題となりつつある。特に、様々な実践とかわる「多文化共生」をめぐる議論においては、もはや避けて通ることができない、決定的に重要な問題とも考えられる。

まず、私がフィールドワークを開始した最初の場面から考えてみたい。そもそも愛知県西尾市での調査を開始する最初のきっかけは、愛知県立大学に着任した直後の2001年の4月、山本かほり氏から西尾市の外国籍住民が集住する団地での調査に誘っていただいたことによる。それまでの私自身の調査経験はというと、島根県、山形県、北海道の農村地域におけるフィールドワークが中心であり、外国人との共生をテーマにした調査は、市民団体であるさっぽろ自由学校「遊」のプロジェクトに参加させていただいた経験がある<sup>③</sup>のみだった。

そのため、調査を前にした私の知識は、たまたま目にしていた一部の先行研究や、愛知県在住の友人から得ることができたごくごく限られた情報によるとても貧弱なものであった。そこで、調査に参加するにあたり、代表的な先行研究、基礎データなどに目を通したが、ブラジル人が増加した地域において「問題」が生じているという程度の認識しか持っていなかったと言える。そのときの状況について拙稿(2008b:52)から引用しておきたい。

これまで外国人の増加した地域では、ゴミ投棄のルール違反、違法駐車、騒音、自治会費等の徴収困難、子どもの不就学、そして外国籍住民と「日本人」住民の摩擦などの「問題」が繰り返しメディアで取り上げられ、「問題」という位置づけが一つの「常識」となってきたと言っていいだろう。これは筆者にとっても同様であった。二〇〇一年の春、集住地域の一つである愛知県西尾市を最初に訪れた際にも、いわゆる「外国人問題」を念頭において調査に臨んだことを記憶している。そ

ここで筆者は「保守的」と言われる地域でどのような対立が起きているか、どのような問題が起きているのかを見ようとしていた。

ここで記したように、まずは、私自身の思い込みをなぞるような「問題」を発見しようとしていたのである。しかし、団地でのアンケート調査、聞き取り調査、そして、外国籍住民との共生を模索する団体での参与観察を続ける中で、地域での取り組みによって、生活レベルでの共生の萌芽を学び、認識の転換を迫られることとなった(拙稿, 2008b)。そして、ここで私自身の課題は、外国籍住民の増加が地域の「問題」を引き起こすという、自明なものとされてきた認識を相対化することだと考えた。そのためには、西尾市のフィールドワークを通じたさらなる実態把握が重要であり、西尾市での活動に継続的に参加しつつ、そこからこの地域が外国人との共生ができるようになる方法を考えようとしていたのだ。研究のひとつの目的は、地域社会の共生に向けての問題と課題、そして可能性を議論する上での基礎資料を作るというものだった。そして、その意味では、「役に立つ」だろうと安易に考えていたのである。

ところが、このような参与観察を約1年続けた2002年の5月、外国人支援団体の代表者A氏から電話をいただいた。いくつか地域の現状についてお話しされた後、特に具体的な問題点を指摘されたわけではなかったが、私たちの調査が、「研究のための研究」とはならないようにしてほしいと厳しく批判されたのである。その時受けた印象はというと、自分の鈍さが大変恥ずかしいのだが、正直大変ショックを受け、驚い

てしまったのだ。

少なくとも、第一段階の報告書をまとめていたので、基礎資料の提供という最低限度の条件をクリアしたのではないかと、何らかの形で役割を果たしているのではないかと非常に甘く考えていた。しかしそんな認識はあっけなく吹き飛ばされたのである。

確かに、A氏が言われたように「研究のための研究」であったのかもしれない。調査結果を報告書にまとめ、調査でお世話になった地元の公民館にて報告会も開催し、知識の共有化を実現していこうとしているつもりだった。しかし、あらためて、おまえは何のために研究しようとしているのか、そして、どのような形でかかわろうとしているのかという点に関しては、とりあえず学会で報告し、論文にまとめるという見通ししか持っていなかったがゆえに、「研究のための研究」という否定的なニュアンスの言葉が投げかけられたのも当然かもしれない<sup>(4)</sup>。「自らの社会的な関心と地元住民の実践的な関心とのズレ」、そして、フィールドワークを続ける中で「われわれの課題に社会学はどう応えてくれるのか」という地元住民からの鋭い問いかけ(足立, 2008:55)に対して、私自身準備ができていなかったと言うしかない。

「何のための研究なのか？」という問いかけ。「研究者」を名乗るおまえ<sup>(5)</sup>はここで何をしようとしているのか、端的に言って、そこにいるおまえは誰なのか？という問いかけ。このことは、その後の西尾市でのフィールドワークを続ける際に、常に意識せざるを得ないこととなった。これに対して、自分自身がとった方向性は、さらに深く、実践的なかかわりを深めていこうというこ

とであった。つまり、「実践者」になろうと  
していたのだ。また、「当事者」にさえなろ  
うとしたこともあるように感じている。

しかし、私はそうすることによって、研  
究を続けていく上で生じる様々な葛藤から  
逃げようとしていたのではないかとも思う。  
つまり、「研究者」という立場を積極的に引  
き受けることができず、中途半端に実践を  
し、「研究者」に対する批判から逃げよう  
としていたのではなかったか。

こうした問題の詳細については、今後引  
き続き検討していきたいが、たとえ「学問」  
のためであれ、基礎データとして、政策提  
言資料として「役に立つ」資料を提供する  
という目的のためであれ、「研究者」という  
立場は、私にとってそれほど簡単に引き受  
けることができないのだ。これは自分にと  
って閉じられた問いではなく、「多文化共  
生」を考える上での、その認識の前提や語  
る立場そのものを問い直しつつ、新たな認  
識を生み出していく可能性を孕む問いであ  
ると思う。

その意味で、最後にもう一度、自分自身  
に対して問い直したい。

そこにいるおまえは誰なのか？

<注>

(1)当日の報告者と報告タイトルは以下の通  
りである（敬称略）。

松宮朝（愛知県立大学文学部准教授）『『外国  
人』はどのようにして『地域住民』となった  
のか？：愛知県西尾市の地域的展開から』

伊東浄江（NPO法人「トルシーダ」代表）・  
大谷かがり（看護師、県大院生）「不就学の子  
どもとブラジル人学校の子どもを対象とした  
NPO活動の実践から」

柳瀬フラビア智恵美（国際基督教大学学生）  
「個人的体験と日系ブラジル人としてのアイ  
デンティティ」

(2)これを誰にとっての、どのような「問題」  
であるのかという点については自明なもの  
として片づけてしまうのではなく、「問題」と  
する認識自体を問い直す視点が必要と考  
えている。この点については、拙稿（2008b, 2008c）  
を参照いただきたい。

(3)この成果は、自由学校「遊」まちづくり  
プロジェクト・チーム編（1997）にまとめ  
られている。

(4)もっとも、「何かのための研究」という  
問題については、早上がりして「〇〇のた  
め」と答えることには慎重であるべきだ  
ろう。社会学、臨床社会学にまつわる「何  
のための」という問題設定の困難と必然  
性については、矢原（2003）の議論が示  
唆的である。

(5)西尾市でのフィールドワークでは、「セン  
セイ」と呼ばれることが一番多く、これ  
は本稿執筆時（2008年11月）まで続  
いている。親しくなった方からは、「松宮  
君」、「松宮さん」と呼ばれることも  
増えてきたが、「センセイ」と呼ばれる  
ことを、あえて遮ることなく、受け入  
れてきた。もちろん、このような関係性  
に対して居心地の悪さや、うしろめた  
さを覚えたこともあるが、結果的に見  
れば、私自身そのような関係性を保持  
し続けていることになるだろう。こ  
うしたフィールドでの関係性の問題  
は、「この困難自体が調査者と対象者  
をめぐる関係性について豊かな示唆  
を与える資源そのものである」（山田,  
2003:580）。そのため、ここでは  
まだ十分論じる準備ができていない  
ため、別稿を準備したい。

<文献>

- 足立重和, 2008, 「生活感覚のフィールドワーク」『社会と調査』 1:50-60.
- 自由学校「遊」まちづくりプロジェクト・チーム編, 1997, 『札幌 多民族・多文化共生のまちづくりに向けて』.
- 中野卓, 1975, 「社会学的調査と『共同行為』」『UP』 33:1-6.
- 松宮朝, 2008a, 「なんで『多文化共生』を考えるんですか?」『共生の文化研究』 1:23-31.
- 松宮朝, 2008b, 「外国人労働者はどのようにして『地域住民』となったのか」, 鶴本花織・西山哲郎・松宮朝編著『トヨティズムを生きる』せりか書房.
- 松宮朝, 2008c, 「それは『問題』ではないかもしれない」『オルタ』 404:28-29.
- 宮内洋・今尾真弓編著, 2007, 『あなたは当事者ではない』北大路書房.
- 矢原隆行, 2003, 「何かのための社会学と社会学のための何か」『社会分析』 30:39-54.
- 山田富秋, 2003, 「相互行為過程としての社会調査」『社会学評論』 53(4):579-593.